

日本西洋古典学会・大会(2015)シンポジウム案

題目：

「プルータルコスと指導者像」（仮題）

要旨：

西洋、とりわけ近世の思想家、文人らに愛されたプルータルコスは、わが国でも近代以降、広く親しまれた古典作家の一人に数えられる。他方、学問の世界に目を移せば、旧来、芳しい評価を受けてきたとは看做し難い。情報源としての価値を認められこそすれ、歴史作家として、文学者として、あるいは哲学者として評価され、自立した研究対象とされることは比較的稀であった。情報源としての価値も今や、慎重な吟味を要するものとなっている。

対して欧米では、近年、プルータルコス再評価、再解釈の気運が昂じている。プラトーンに連なる哲学の伝統を享受し、文学、史書、修辞学、その他、浩瀚な文献に接した同作家が、それらを如何に継承し、作品を彫琢したか。帝政ローマ統治下にあるギリシア世界、あるいはセカンドソフィスティックといった同時代の政治的・知的状況が、現実の読者を前にした作家に如何なる作用を及ぼしたか。国際プルータルコス学会の研究活動からだけでも、視点の多様性、議論の活況を少なからず窺い知ることができよう。

本シンポジウムは、こうした流れを受け、プルータルコスが継承してきた知の有り様、彼自身が生きた知的ミリューを視野に入れつつ、改めて彼の作品、記事の意味、叙述の特質を吟味し再評価する試みである。広範に亘る著作群から今回は、とりわけ江湖に知られた『英雄伝』を取り上げ、そこに描かれた「指導者像」を議論の焦点とする。政治活動こそは、プルータルコスの著作に広く認められる、鍵とも言うべきテーマであり、その叙述は強い倫理的色彩を帯び、同時代の政治状況、思想状況を映し出す。また伝記というジャンル、作品の構成、修辞、そして先行の諸作品もまた、作家の筆に種々の影響を及ぼしている。それ故にこそ、「指導者像」を焦点に、哲学、史学、文学それぞれの視点から、視線を交錯させながら、議論を交わし、理解を深める意義は決して小さくあるまい。さらに言えば「指導者像」は、プルータルコスにとどまらず、古典作品の多くに通底する主題でもある。議論が及ぼす影響は広範に亘るものとなるであろう。本シンポジウムを通じ、プルータルコスとその知的環境に新たな光を投げかけ、さらなる議論の呼び水としたい。

企画準備会：

木原志乃（国学院大学）[哲学]

小池登（首都大学東京）[文学]（代表者）

佐藤昇（神戸大学）[史学]

平山晃司（大阪大学）[文学]